



サリドマイド児等両上肢障害児 ——日常生活動作・教育・職業——

上肢障害児福祉研究会 代表 手塚直樹 編

昭和 35 年から 38 年をピークに前後して生じたサリドマイド禍は、多くの問題を残しながら、10 余年の歲月を経て法的目処がつけられた。対象児らの多くは、かつて、乳幼児期から低学齢期を中心に、基礎的医療管理や素手による生活適応能力の向上及び拡大をはかり、一方では、義手使用による能力の開発が行なわれてきた。これらの児童の出生から現在までを十分に掌握し、やがてそれぞれの学校から社会へ巣立つ本人達をはじめ家族やリハ関係者のよき道しるべとなる書を紹介したい。

本書は、わが国におけるサリドマイド薬禍の全貌を、主として生活・教育・職業・人生などの各分野で著者らが豊かな学識と多年に渡るすぐれた指導経験からその実態と今後の課題を明確に打ち出している。この膨大な調査・研究課題の中で、いくつかの貴重な資料が出されている。先ず身辺自立に必要な生活動作では、その成就率と将来の職業の成功率に密接な関連のあることが改めて浮き彫りにされている。教育面では、中学から高校・大

学へのそれぞれ進学に際し、本人を含む家族の心理的動揺や学習面での具体的問題が紹介されている中で、感銘した点は、本人達の努力は涙ぐましいもので、良い人間関係を造り出すことにより周囲の理解や協力を得ていることである。職業に関してもやがて間近な問題であり、関心と不安の交錯する中を、当面教育に全力を投入している現状で、今後は両上肢障害者の就労実態を各面から分析していく中から糸口が見出されていくようである。最後の章では、上下肢の切断や傷病により障害をもつ立派な先輩諸氏が、座談会を通して本人及び家族に対し、今後の人生へはなむけの示唆を与えておられる。かつて本児らは、健常な四肢による自在な生活体験を知らずやがて青年期を迎えようとしている。この書は、対象児らの多難な成長過程を各面からとらえ、今後の課題をも提示している。是非ご一読されるようおすすめしたい。

(A 5, 289 頁, ¥ 2,000, 1977, 相川書房)

(整肢療護園, 作業療法士 山田瑞子)